

第5章 木戸刈屋から本山海岸

木戸刈屋は、竜王山の北西にあり、刈屋漁港からは山肌に立ち並ぶ家屋を見ることができます。

また、大浜や本山には、昭和初期以降に栄えた炭鉱の遺構があり、竜王山の山すそにある「ハマセンダン」の巨樹は見る者を圧倒します。

竜王山や焼野海岸から見る海や夕陽は美しく、整備された海岸を散歩しながら、遠く九州を臨む風景を楽しめます。



写真位置図

国土地理院地図

1. 昔ながらの町並みが残る木戸刈屋

木戸刈屋は、竜王山によって三方の風の影 響が 少ない天然の港で、漁村として比較 的に早くから開けていたようです。中世末期と思われる記録によると、「木戸刈屋浦に大勢の海賊が襲来し討伐した」との記載があり、この頃には漁村集落が形成していたと考えられます。

かつては、海と集落との距離が近く、港に足をおろすとそこには家々が並んでいました。

海岸沿いの道ができるまでは、竜王山の中腹に造られた「中道」が、刈屋の主要道路でした。この道は船木から刈屋の港を結ぶ往還道（3里23町、約14.3km）で「刈屋道」と呼ばれています。

道沿いの集落には、幅1mほどの石段が縦に走っており、その両側には、石垣を高く積み上げた狭い敷地に家が立ち並んでいます。山の中腹から眺めると、連なる家の屋根の向こうには海が広がり、漁村特有の風情が感じられます。



刈屋の風景 年未詳
(歴史民俗資料館蔵) ★33



刈屋道 令和6年(2024)撮影 ★34

刈屋漁港の波止先には、立派な常夜灯が残っています。この周辺の海の平穏を願い、文政元年(1818)に吉敷毛利家によって建てられました。

明治の終わり頃まで毎晩灯されて、木戸刈屋の位置を沖の船に伝えるとともに、港に出入りする船を静かに見守る灯台として役目を果たしていました。



常夜灯 令和6年(2024)撮影 ★35

コラム④



『龍王宮利生記』～木戸・刈屋の鎮守八大竜王宮～

八大竜王宮の旧社家である池田家に伝わった『池田家文書』(歴史民俗資料館寄託)の中に『龍王宮利生記』という史料があります。「利生」とは、「神仏が利益を与える」という意味で、木戸浦・刈屋浦の住人を中心に、八大竜王宮より与えられた「利生」について数多くの話がまとめられているものです。その中の一つの話を紹介いたします。

天保9年(1838)10月6日と10日の夜に大風が吹き、漁人が多数被害にあい、船の破損や九死に一生を得ました。近隣の浦々は大きな被害を受けたが、木戸浦だけは一艘の被害もなく、人々の被害もなかった。これは、毎年10月16日に竜王宮の祭礼を賑やかにっており、竜王宮がそれに感応したのだと語られているということです。

この他にも海で遭難したが、八大竜王宮から光が照らされ、無事に帰ってこれたという話や、八大竜王宮へ奉納する太鼓を下関で購入した帰りに大漁だったという話などが記されています。

神仏に対する信仰の形は時代とともに変化してきました。『龍王宮利生記』は、私たちの祖先がいかに地域の寺社を大切にしていたのかを知る貴重な史料です。

2. 木戸刈屋盆唄^{ぼんうた}

「木戸と刈屋の境の松は、わしが植えたが育つやら」で始まる木戸刈屋盆唄は、萩藩^{はぎはん}の家老^{かろう}の姫^{ひめ}と足輕五郎^{あしがるごろう}の悲恋^{ひれん}を題材とし、唄^{うた}と舞^まい踊^{おど}りがこの地に伝え継^つがれてきました（唄^{うた}の由来^{ゆらい}は諸説^{しよせつ}あり）。つま先^{なな}を斜^{なな}め後^{うしろ}ろに地面^すを軽く摺^すらし、左右^{さゆう}両手^{りやうて}を交互^{こうご}に上げて手首^{てくし}をひねる踊^{おど}りの所作^{しよさ}は優雅^{ゆうが}なものです。

昭和 30 年（1955）頃までは、盆の 7 日間踊られていましたが、現在は、木戸地区、刈屋地区のそれぞれの盆踊りの日に踊られています。



木戸刈屋盆唄踊 令和 6 年（2024）撮影
（個人提供）★36

3. 竜王山^{せん}をとりまく海岸線

竜王山^{りやうおうさん}の母岩^{ぼがん}である「緑^{りよく}色^{しよく}片岩^{へんがん}」は、焼野海岸の波打ち際^{なみ}でも見ることができます。これは、今から約 3 億年前（古生代^{こせいだい}）に堆積^{たいせき}した石英^{せきえい}鉱物^{こうぶつ}の少ない火山噴出物^{かざんふんしゅつぶつ}が、約 2 億年前（トリアス紀^き）に、海洋プレート^{かいやうぷれいと}の沈み込み^{しずこみ}型造山運動^{がたぞうざんうんどう}によって高い圧力^{あつりよく}の変成作用^{へんせいさよう}を受け、塩基性^{えんきせい}の緑色片岩^{りよくしよくへんがん}になったものです。



海岸線の緑色片岩 令和 6 年（2024）撮影 ★37

焼野海岸は竜王山のふもとに広がる海岸で、海水浴^{かいすいよく}や潮干狩り^{しおひが}ができる海岸として市民に親しまれていました。

平成 11 年（1999）7 月 20 日にオープンした「きららビーチ焼野」は、コースタル・コミュニティ・ゾーン（C. C. Z.）事業の一つとして、海水浴^{かいすいよく}や磯生物^{いそせいぶつ}の観察^{かんさつ}等ができる海浜^{かいひん}ゾーンなどの整備だけでなく、高潮^{たかしお}・浸食^{しんしょく}に対する防護^{ぼうご}のため突堤^{とつてい}や緩傾斜護岸^{かんけいしゃごがん}、人工リーフ^{じんこうりふ}、養浜^{ようひん}などの海岸整備も行われました。現在も、海水浴やマリンスポーツなどが楽しめる憩い^{いこ}の場^ばとなっています。また、美しい夕陽^{ゆふが}を見ることができ、「日本の夕陽百選」に選ばれています。



焼野海岸 潮干狩り 平成 6 年（1994）頃
『小野田市焼野海岸 コースタル・コミュニティ・ゾーン
整備計画書より転載』★38



焼野海岸 平成 30 年（2018）撮影 ★38

4. かいいてい 海底につづく炭鉱

竜王山周辺には、大正以降に海底炭鉱の操業そうぎょうが始まり、昭和 10 年代以降、本山炭鉱や大浜炭鉱といった大規模な炭鉱が営業採炭えいぎょうさいたんしていました。大浜から本山岬への海岸沿いには炭鉱住宅が立ち並び、炭鉱で栄えた頃ころは急激きゅうげきに人口が増え、そのため、昭和 15 年（1940）に本山小学校を開校し、その年の 9 月には校舎こうしゃの増築ぞうちくが決定されるほどでした。採掘が盛んさいくつに行われていた当時、焼野海岸には石炭積み出しの栈橋さんぼしがあり「炭鉱のまち」ならではの風景がありました。

現在でも市内に炭鉱の遺構があり、その遺構の一つが「旧本山炭鉱斜坑坑口きゅうもとやまたんこうしゃこうこうぐち」です。坑口とは、その炭鉱に入るための入り口で、昭和 16 年（1941）に完成したとされ、昭和 38 年（1963）3 月にその坑口を閉鎖へいさするまで使用されていました。



本山半島航空写真 昭和 36 年（1961）
（歴史民俗資料館蔵）★39



旧本山炭鉱斜坑坑口 平成 22 年（2010）撮影 ★40